

## 博士学位論文審査要旨

2008年6月6日

論文題目：多国籍企業の世界的再編と国境経済圏

学位申請者：上田 慧

審査委員：

主査：商学研究科 教授 太田 進一

副査：商学研究科 教授 亀田 尚己

副査：商学研究科 教授 岡本 博公

要旨：

本論文は、学位請求者が、多国籍企業による海外立地戦略における輸出加工拠点の重要性に着目して、東南アジアの成長の三角地帯、マキラドーラによる米墨国境地帯、中国の珠江デルタの3地域に着目して、とりわけ本論文ではメキシコのマキラドーラと中国の珠江デルタの2地域を中心に分析し、考察している。

ここ10年以上にわたる現地調査を踏まえて、米墨国境地帯や米加国境地帯における「国境経済圏」と、中国の珠江デルタ地帯における、香港と中国広東省との商流・物流の交易、あるいは中越国境地帯における「国境経済圏」の役割に注目している。メキシコのマキラドーラにおいては、NAFTA形成以降においても、保税加工としてのマキラドーラの役割が大きく、米国内市場を対象とした米墨国境地帯における「国境経済圏」が形成されていること。また、中国珠江デルタ地帯においても、香港を通しての外資の中国への進出や、英国から中国への香港返還後においても、香港が現状においてもなお中国国内への商流・物流での中心的役割を果たしていることを指摘している。いわば「国境経済圏」と同じような役割や現象がみられることを分析している。

本論文は、序章も加えて全体で11章立てとなっている。

序章では、1990年代以降において、EUやNAFTAなどの地域経済統合が広がる中で、多国籍企業が巨大統合市場に拠点を持つマルチリージョナル企業としての性格を強め、米国系企業に対して日系企業が地域統括会社を利用した特質をもつことが指摘されている。さらに、雁行形態発展論や多国籍企業、各国の地域経済の発展に関する先行研究を検討しつつ、近年の輸出加工区(EPZ)の世界的増加に注目し、とりわけ局地的な「国境経済(border economy)圏」が成立し、大きな影響を与えていることを主張している。

第1章は、局地的「国境経済圏」の典型としてメキシコのマキラドーラの保税加工制度について考察し、他方ではシンガポール、マレーシア(ジョホール州)、インドネシア(バタム島)の3カ国を結ぶシジョリーGTについて、日系企業の地域統括会社を利用した動向を調査し、「相互補完的な局地的国境経済圏」との特徴付けをしている。

第2章では、米国大統領経済報告の分析を手掛かりに、マキラドーラの登場した背景、NAFTAと多国籍企業の企業内国際分業との関連性を考察している。ことに、日系マキラドーラ協会(JMA)の活動、日系電機メーカーのツイン・プラント型マキラエ場の実態を明らかにしている。

第3章は、米国の対メキシコ直接投資の歴史的特徴、分工場化されたカナダとメキシコに

における多国籍自動車企業の展開、NAFTA成立の要因と効果について分析している。

第4章では、国連貿易開発会議（UNCTAD）の輸出加工区ライフ・サイクル論に焦点を当てて、マキラドーラの発展史を理論的に考察している。

第5章は、輸出加工区とマキラドーラの類型分析として、類型化や輸出経済発展段階説などの米国先行研究を検討して、マキラドーラの3類型であるツイン・プラント、下請け契約、シェルター会社を紹介し、国境型マキラと内陸型マキラを分析し、相違と定義を明確にしている。

第6章では、中国で最も成長率が高く輸出総額の4割を占める広東省の珠江デルタにおいて、多彩な産業集積と都市地域ごとの特有の産業クラスターが形成されていることを分析している。ことに、外資が設立した香港現地法人を介して、中国大陸との境界をはさんで行われる「三来一補」などの委託加工貿易が広東省の貿易の約8割を占めることに注目している。マキラドーラとの保税加工貿易の共通性を見出している。

第7章は、順徳がかつては「蚕基魚塘」農法に基づく世界的な養蚕・製糸地域であったこと、海上シルクロードの起点として、上海、天津を上回る工業都市であったことが内外の資料を用いて分析されている。

第8章では、珠江デルタ西岸内陸部における「順徳企業群」の形成と発展を、絹工業などの農村工業を基盤に「生活関連型田園工業都市」としての内生的発展過程を分析している。「順徳模式」として、日系企業を含む外資と内資企業との競争と交流の地域的ネットワークの形成を強調している。

第9章は、メキシコのマキラドーラと中国の珠江デルタの「加工装束」と両地区の比較対象を行い、両地区での加工貿易の点での近似性ととともに、歴史的発展や国内的な経済事情の相違にも言及している。

第10章では、メキシコのマキラドーラをめぐるグローバル競争として、米国会計検査院の包括的な資料から、マキラドーラ「衰退」の諸要因について考察している。しかし、TVバレーや工業団地型マキラドーラを紹介することで、地域別・産業別の不均等発展を分析し、「復活」ぶりを指摘し、再編成の進展を示すことでまとめとしている。

本学位請求論文の概要は以上のとおりである。本論文が対象とする輸出加工の地域であるメキシコや中国珠江デルタ地域に関する個別の研究は見られるが、上田氏が指摘するような、保税輸出加工の局地的「国境経済圏」は、米加国境やカリブ海諸国、中越国境地域、東欧へも広がり、「マキラドーラ・シンドローム」とも言える現象が発生しつつある。その意味では、上田氏が本論文で提起した「国境経済圏」の今後の研究対象地域の広がり、氏にとっても今後の研究課題ともなろう。

本論文の強みは、なんといつても現地調査を踏まえながら分析を行っていることであろう。多国籍企業の分析を、フィールドワークと多くの資料や文献により総合的に分析・考察している点で何よりも説得力がある。また、メキシコ・マキラドーラと中国珠江デルタという、およそ物理的距離からしても遠く離れ、異なった経済地域での多国籍企業の展開から、「国境経済圏」の分析での共通性を見出そうとした点が、氏の独創性であると言えよう。香港は返還後においては、現状では中国の一地域に位置付けられながら、従来からの商流・物流や外資の窓口としての役割を現在もなお果たしている特別な地区である。香港は周辺の地域である広東省や珠江デルタ地域と密接な関係にある点は、現地に赴いた人間でないと実感として理解しがたい構図でもあろう。上田氏がこの点において、さらに詳細な分析を手掛かりに、読者に対して説得できるようにし、今後「国境経済圏」の研究の対象

を広げることによって応えられることが研究課題となろう。

本学位請求論文は希少性と独創性の点から博士（商学）（同志社大学）を授与するに充分値する研究であると審査員一同判断するものである。

## 学力確認結果の要旨

2008年6月6日

論文題目：多国籍企業の世界的再編と国境経済圏

学位申請者： 上田 慧

審査委員：

主査：商学研究科 教授 太田 進一

副査：商学研究科 教授 亀田 尚己

副査：商学研究科 教授 岡本 博公

要旨：

2008年5月20日に上田慧氏の学位請求論文に関する口頭試問を約2時間にわたって実施した。主査と副査による質問やコメントに対して、丁寧にかつ的確に回答し、上田氏が本論文において主張し、描こうとした構図を理解することができた。

上田氏の専門分野は多国籍企業論、公企業論等である。本論文は、論文題目にある通り、多国籍企業の海外立地戦略により、輸出加工拠点が地域的に「国境経済圏」に形成されている2地域を主として対象にして、考察と分析を加えた論文である。

同志社大学へ赴任後、約10年間にわたり、精力的に現地調査を実施し、関連文献の読破と引用により、本論文がまとめられている。本論文と口頭試問を通して、上田氏は、多国籍企業論等の専門知識が豊かであり、かつ奥行きのある理解をしていることが判断できた。また、今回は業績審査の対象となっていないが、公企業論に関しても、研究業績書にある通り、多くの論文や著作はこれまで関連の学会等で高く評価されてきたところである。

さらに引用されている英語や中国語の文献から、また今回の口頭試問を通じて、語学力も確実であり、英語を対象とする語学試験に関しては申し分のないレベルに達していることが判断できた。

以上のことから、本学位申請者である上田慧氏は、多国籍企業論を対象とした専門分野に関する学力は的確であり、また英語を中心とする語学力に関しても水準の高い位置にあることが確認できた。博士（商学）（同志社大学）に値すると判断できる。

## 博士学位論文要旨

論文題目： 多国籍企業の世界的再編と国境経済圏

氏 名： 上 田 慧

要 旨：

### 1. 研究課題

本論文は、多国籍企業論の海外立地戦略として、輸出加工区など国際加工拠点を対象に、現地調査を踏まえ、東アジア、メキシコ、そして中国の珠江デルタ、以上3地域の考察を中心に、「局地的国境経済(border economy)圏」としての特性を比較し、考察したものである。

1990年代以降、E UやN A F T Aなどの地域経済統合がすすむなかで、多国籍企業は、北米・欧州・アジアを基盤にマルチリージョナル企業として、グローバルな立地戦略を展開してきた。本論文では、多国籍企業が、世界各地の輸出加工区(Export Processing Zone)を活用することによって、そこに一定の局地的経済圏が存立することに注目している。

とりわけ、3カ国をクロスしたシジョリーGT(黄金の三角地帯)を、技術・資源・人材等の「相互補完型の局地経済圏」として位置づけ、近年、直接競合しつつあるマキラドーラと珠江デルタの産業集積の国際比較を中心テーマにしている。メキシコのマキラドーラの調査をもとに米墨国境地帯を「局地的国境経済圏」と規定し、さらに来料加工が発展した珠江デルタの産業集積を「委託加工型局地的経済圏」と特徴づけている。

国境をクロスし、隣接国間の制度的差異を活用した多国籍企業の立地戦略に着目し、そこに形成された産業集積に基づく地域経済圏を「局地的国境経済圏」と規定し、国際比較をしつつその特性と課題の解明を課題にしている。

### II. 論文の構成

#### 1. 多国籍企業と国境経済圏(第1章)

N A F T Aなど地域経済統合が広がる中で、多国籍企業がマルチリージョナル企業として国際経営戦略を展開しているが、米国と日本の企業の展開には相異があることを考察している。また、世界各地で輸出加工区が増加している状況のもとで、多国籍企業が国境をクロスして活動する中で、そこに一定の産業集積やクラスターの形成がみられることから、局地的国境経済圏と規定している。その典型として、メキシコのマキラドーラを分析したのち、日系の大手家電メーカーの協力を得てシジョリーGTについて考察した。

シンガポールの投資・技術・管理機能と、マレーシアの資源、インドネシアの人材など3カ国の資源や特性を相互に補完しあい、外資誘致により、工業団地型のクラスターを形成しつつあることから「相互補完型局地的国境経済圏」と規定した。日系各社はこうした優位性の移動には柔軟に対応しており、現地への積極的支援と政府との交流の重要性について、考察した。

## 2. NAFTAとメキシコのマキラドーラ(第2章)

米国大統領経済報告(1991年)を手がかりに、マキラドーラが登場した背景について触れ、NAFTAと企業内国際分業の再編について考察した。日系マキラドーラ協会(JMA)の協力のもとに現地調査を行い、多国籍企業の双子工場(ツイン・プラント)方式など、マキラドーラの特質と産業集積について考察し、地場産業からの調達率が著しく低いことが重い課題であり、飛び地(enclave)型といわれる国際輸出加工地域としての問題点も探っている。

## 3. マキラドーラと多国籍企業(第3章)

国際経営戦略の現状について触れ、カナダとメキシコの自動車産業を例に、NAFTA成立の要因を探り、米系多国籍企業のメキシコ進出と、メキシコのマキラドーラ化の問題点について触れている。

## 4. EPZライフ・サイクル論とマキラドーラ(第4章)

輸出加工区をめぐるライフ・サイクル論をマキラドーラの発展史に沿って考察した。「メキシコのマキラドーラ化」が加工貿易国家化を示す恐れがあることを、米墨間貿易額に占めるマキラドーラ貿易の現状から考察し、多国籍企業による垂直的な国境貿易がメキシコ経済にビルトインされていることを論証した。

## 5. 輸出加工区とマキラドーラの類型分析(第5章)

マキラドーラの3類型(ツイン・プラント、下請契約、シェルター会社)を析出し、国境型マキラ、内陸型マキラと規定して、その相異と定義を明確化した。西海岸TVバレーにおける三洋電機の実例、現地北米資本の例を示し、北米向けマキラ保税制度の廃止が、必ずしもマキラドーラの衰退に結びつかず、産業別・地域別分析によって異なり、資本集約型の新型マキラドーラへの集中再編がすすんでいることを指摘した。

## 6. 中国・珠江デルタにおける経済的統合と競争(第6章)

珠江デルタは、中国でもっとも成長率の高い広東省に属し、多彩な産業集積と地域ごとの特有のクラスターが形成された地域であり、香港一大陸間の境界を挟んで急成長する局地的経済圏の解明に努めた。外資が設立した香港法人を介して行う委託加工(来料加工と転廠)制度が珠江模式(モデル)とよばれ、進料加工や来様加工などの「三来一補」を考察した。珠江デルタでは、東莞など委託加工依存の不安定性をもつ東岸地域に対比して、研究上手薄であった、珠江デルタ西岸内陸部に位置し、家電・家具・花卉園芸の世界的集積地である佛山市順徳区の産業集積に着目し、その特徴を考察した。

## 7. 中国・珠江デルタにおける順徳(Shunde)の歴史的地位に関する諸問題(第7章)

順徳は、かつて世界的な養蚕・製糸専業地域であり、海上シルクロードによる商品経済の発達が目撃されており、上海、天津と並び称せられる工業都市であった。この地域の「蚕基魚塘」という生態農法を基礎にした農村機械工業の発達、郷鎮企業の民営化から多くの家電メーカーを輩出させ、多彩な産業群を生み出した過程を明らかにした。

## 8. 中国・珠江デルタにおける順徳企業群の形成と発展(第8章)

順徳の定点観測に基づき、国際的なマインドを持ちながら、田園工業都市としての内生的発展を模索している実態を明らかにした。とくに各鎮政府がサポートした多数

の専用工業・販売団地の形成=ゾーン型開発に注目し、日系を含む外資との交流ネットワークを堅固にし、「国際製造業の集積基地」建設を目標とする同地域の躍動する姿を地域別に調査し、考察した。松下環境システム有限公司のケーススタディにより委託加工に発して、独資化を達成したプロセスと、地場経済界や政府との交流ネットワークづくりも考察した。

#### 9. 国境経済圏と輸出加工方式—マキラドーラと珠江デルタの加工装束—(第9章)

珠江デルタの委託加工とマキラドーラとの比較検討により、保税システム、増値税還付などの面で類似性が強いことを明らかにした。同じ輸出加工でありながら、マキラドーラの劣勢はどこにあるのか。その点を珠江デルタの各都市における多彩なクラスターの考察から解明に努めた。

#### 10. メキシコ・マキラドーラをめぐるグローバル競争(第10章)

マキラドーラ衰退説の検証を中心に、マキラドーラの地域別分析から新しい傾向について述べ、その「復活」の傾向を考察した。期せずしてメキシコと珠江デルタに日系自動車メーカーが集積しており、局地的国境経済圏の新しい課題について論じている。

以上のように局地的国境経済圏は、伝統的な国境貿易が盛んな地域である民営経済型の珠江デルタ、マキラドーラ、シジョリーGTなど多彩な特性を持つが、概ね、地域的性格の強い自生的自律的な地元経済圏をコアにする経済圏であり、今後のゆくえが注目される。